

永遠の命と共に歩く

[ルカによる福音書 24 章 13～29 節]

ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起こったことを、あなただけをご存じなかったのですか。」イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。仲間の者が何人か墓へ行ってみたのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたって、御自分について書かれていることを説明された。

一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。

[1] 「永眠者記念礼拝」とルカ 24 章

今日の「永眠者記念礼拝」にどの箇所のみ言葉をご一緒に味わったらよいか、色々と思いつく中で、このルカ福音書 24 章の物語が示されたような気が致しました。ここは普通、主の復活（イースター）の時に読まれるのが相応しい箇所であると思いますが、それは「死」と「甦り」の物語であるという点で、この召天者記念礼拝においても主が私たちに語って下さっているように思いました。

[2] 「死」の前になす術がない私たち

先ほど一緒に歌った讃美歌は、今日の聖書の物語からインスピレーションを受けた歌だと言われています。余談ですが、この讃美歌は私の大好きな讃美歌の一つで、私の葬儀の時には是非歌ってほしいなと思う讃美歌です。1節の歌詞はこうでした。「日のかげは 薄れゆき 暗き闇 身を囲む 助けなき この我と ともに 在(いま)せ わが主よ」。この「ともに 在せ わが主よ」(abide with me)は、以前歌っていた教団讃美歌ですと、最後の所は「主よ、共に宿りませ」となっていますが、この言葉は、今日のルカ 24 章 29 節「一緒にお泊りください」から来ています。「イエス様、この私と共にいて下さい!」という嘆願、祈りの言葉です。この祈りはとてもシンプルですが、またとても大事な祈りの言葉だと思います。事実、この物語の二人の弟子は、この祈りから、主イエス様との交わりを通して、心の目が開かれる経験をしたのです。それは「闇」から「光」へと移される経験であったとも言えると思います。

私たちにとってどうしようもないこと、如何ともし難い現実というのは、「死」です。今日の物語の登場人物は、親しい者の「死」の現実になだれ、悲しみ、挫折を経験している者たちだと思います。今日、私たちは先に主の許に召された者たちを覚えながら礼拝を捧げていますが、その方が近い人、親しい人であるほど、遺された私たちの中には癒し難い思いがどこかにあるのではないのでしょうか。もうその方とはこの地上では会えないのです。

今 NHK で放送して、今週終わりを迎える朝ドラの「おかえりモネ」も、10 年と半年前のあの東日本大震災がモチーフになっていて、何も出来なかった心の思いを人に言えず抱え込んでいるとか、あの時自分の奥さんを失った漁師が、深い悲しみの故に自分を許せなくなってしまうとか、そのような人々が出てきます。そしてあのドラマは、楽観的なことは言わないのがいいですね。むしろこのことはとても時間がかかるんだ、また自分一人ではどうしようもないことなのだ、ということを私たちに提示してくれているように思います。

ルカ福音書の中に描かれているイエス様の二人の弟子は、イエス様の死を目のあたりにし、深く挫折をしています。二人(クレオパともう一人。クレオパの妻という説も)は都エルサレムの丘の上で十字架で殺されてしまった、自分たちの師でもあるイエス様のことについてあれこれ語り合いながら歩んでいました。悲しみは勿論人を沈黙させることもありますけれども、自分一人では抱えきれないので、やたらと仲間どうしで饒舌になるということもあると思います。この二人も、最早従ってゆくべき方、信じる方を失い、自分の以前の生活の戻るべくエマオの村に歩いていく最中であつたのではないのでしょうか。エルサレムから 60 スタディオン(約 11 キロ)あるその道のりを力なく歩いていたのだと思います。

す。しかも、段々と夕暮れが近づいて来る。電気の灯りなどない時代です。闇が迫って来る。これは「死」を前に、全く無力な人間の姿を象徴しているかのようです。しかも、親しい者の死を経験する時、(私もこの春先に母を失うという経験をしましたが) 私たちの中には、無力感と共に、喪失の思い、感謝というよりは、ごめんなさいという気持ち、悔い、至らなかった言動の数々が頭をよぎり、いたたまれない思いを持ってしまうということがあります。そのチクチクした思いというのはずっと持ち続けるものでしょう。愛する者が亡くなってしまった時、私たちを一番苦しめるのは、和解したかったけれど、それが出来なかったという思いではないかと思います。「死」というものは、「共に」という時間を喪失させてしまう。詩編の中に「**今、わたしに親しいのは暗闇だけです**」(詩編 88:19)という絶望的な言葉がありますけれども、この時の自分の村エマオに帰ってゆく二人も、そのような気持ちであったのかも知れないと思います。

けれども、聖書は驚くべき事柄を証言してくれているのです。完全に隔てられてしまった「**死**」という壁の向こうの方から来られた主イエスが、死の現実途方にくれ、ただ空しくおしゃべりするしかなかったこの二人の会話を聞き、その只中に入り込んで下さったということを証しています。消えてしまったと思っていた「**共に**」が再び始まるのです！ 聖書が告げる救い主は、私たちの悲しみや絶望の中に、向こうからそっと入り込んで下さるお方なのです。この二人の弟子は、このお方がイエス様だとは分らないのです。まるで普通の人のように思えた。そうです、主はそれほど迄に近く、私たちの日常の中に入って来て下さるお方なのです。そしてある意味とてもユーモラスだと思います。死んでしまわれた筈の主イエス様が“あなたたちのそのイエスの話は何のことだい？”と言わんばかりに、この二人と共に歩調を合わせて行かれるのです。ある牧師はこのように言われました。「エマオ途上のキリストは、まず私たちの悲しみを聞く人になって下さいました」。本当にそうではないでしょうか。

[3] 遺された私たちのために主は共に歩まれる

なぜ、イエス様はこの二人と共に歩まれたのでしょうか。それはまず、彼らを赦すためではないでしょうか。先ほども申しましたが、親しい者の死を経験すると、自分の不甲斐なさ、傷を与えたことの数々、罪深い思い出、それが自分を苦しめることがあります。けれども救い主は“あなたの話していることは何のことですか？”と、責めるどころか親しく話しかけて下さり、あなたがたは十字架の出来事で挫折した、ということのようだけれども、そもそも聖書が示す救い主はそこを通過して栄光に入るのではなかったかな？ と、ご自身、み言葉を解き明かして下さったのです。ここには既に、**弟子たちに対する赦しがある**と私は思います。

私たちは今日、どなたかの永眠者の家族であるかもしれません。亡くなった者の家族を「遺族」と言いますね。遺された者。つまり、永眠者は先に行って、私たちは遺されているのです。永眠者は、先に**キリストの甦りに与ります**。聖書はそう語ります(テサロニケー4章など)。もう**神の命、永遠の命**の中にいるのです。ですから私たちは永眠者の方々については何も心配もしなくて良いと思います。今、神様の平安の中にいるに違いないのです。

この物語は、むしろ**遺された私たちのために**語られていると思います。キリストは、私たちの罪を赦して下さい。私たちの中の、隠された、或いは、こびり付いてしまったと思う罪・過ちも、私たちが再び前を向いて歩いて行けるように赦して下さい。それがあの十字架です。私たちへの愛の極みです。

この物語で、「そろそろ夕方になりますから」と、イエス様を無理に引き留めたという所があります。これが大事なのだと思います。「私たちを、闇の中に置き去りにしないでください！ 主よ、どうぞ共にいて下さい！」。—「主よ、共に宿りませ」ですね。主は、夕暮れ迫る**挫折の道**を共に歩まれ、私たちの**罪の闇**が覆う時も、私たちと共に居よう！とされる方なのです。本当の闇を経験された方はただ一人、主イエス様です。あの十字架の叫びは、それを現しています。しかし、その闇と死を経験されお甦りになった方が、私たちを赦し、更にこの人生の道行きに同伴されているのです。このお方は死をくぐり抜けて来られた“**永遠の命そのもの**”のお方です。「**この方こそ、真実の神、永遠の命です**」。(一ヨハネ5:20)。

私たちは、既に召された信仰の先人に続いて、やがていつか召される者ですが、驚くべきことに、今、私たちの人生には、この「**永遠の命**」なる方が、いつも共に生きて下さっているのです！ 暗い心の中にも、太陽のような光を与えて下さるのです。

イエス様は、私たちが気が付かない時も、打ちひしがれている時も、後ろからそっと近づき、み言葉を語りかけて下さるのではないのでしょうか。或いはこのルカ福音書の物語ではこの後、主がパンを裂いて下さった時に二人の目が開けたとありますが、主が臨在される場所で、ご自身が生きておられる救い主であることを私たちにも悟らせて下さるのではないのでしょうか。共に、主のみ国でその宴に与ることが出来るまで、主イエス様との二人三脚、或いは三人四脚、或いは、時にもっと多くの者たちと、それぞれの置かれた場所で、生きてゆきたいと思いません。主が、その時その時に語りかけて下さるみ言葉に慰められ、励まされながら。お祈り致します。



2021 年 10 月 24 日 川越教会 墓前礼拝

春夏秋冬、そして詩編 23 編

宣教 丸山勉

[詩編 23 編 1～6 節]

【賛歌。ダビデの詩。】

主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。

主はわたしを青草の原に休ませ 憩いの水のほとりに伴い
魂を生き返らせてくださる。

主は御名にふさわしく わたしを正しい道に導かれる。

死の陰の谷を行くときも わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖 それがわたしを力づける。

わたしを苦しめる者を前にしても あなたはわたしに食卓を整えてくださる。

わたしの頭に香油を注ぎ わたしの杯を溢れさせてくださる。

命のある限り 恵みと慈しみはいつもわたしを追う。

主の家にわたしは帰り 生涯、そこにとどまるであろう。

[4] 人生の四季と詩編の言葉

この詩編 23 編は、私たちの人生の色々な季節にあてはめて味わうことが出来る詩編ですよ。主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青

草の原に休ませ 憩いの水のほとりに伴い 魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく わたしを正しい道に導かれる。」—ここは何か人生の春また夏のようなイメージがあります。そしてそのあとは、充実は感じながらも様々な重たい試練を経験するするような人生の秋のような感じでしょうか。「死の陰の谷を行くときも わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖 それがわたしを力づける。わたしを苦しめる者を前にしても あなたはわたしに食卓を整えてくださる。わたしの頭に香油を注ぎ わたしの杯を溢れさせてくださる。」

そして終結部の 6 節は、人生の終わりを見つめる冬の時と言っても良いかもしれません。「命のある限り 恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り 生涯、そこにとどまるであろう。」

日本に四季が巡ってくるのはとても励まされるような気がします。秋や冬もあるけれども、季節はまた春を迎える時が来る。この詩編 23 編も「死の陰を行く時も」と、厳しい現実も直視していますけれども、全然暗くないですよ。どこの部分にも明るい光が差している。それはやはり、最初の一節が全体を包んでいるからだだと思います。「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない」！ 詩人（ダビデ）はそう言い切っています。「主は」私の羊飼いだ。どんな人生の場面においても。羊である私の人生の責任をこのお方が取って下さるから私は満たされていると。—キリスト教のお墓には色々な聖句が刻まれていますけれども、この詩編 23 編 1 節もとても相応しい聖句だと思います。

[2] 主こそ私たちの羊飼い

一つの逸話をご紹介しますと思います。もう何百年以上前のイギリスのウェールズの田舎に、二人の牧師が旅をしました。ある丘の上で羊飼いの少年に出会いました。少年は学校に行ったことがなく、聖書も知りませんでした。牧師たちは、この少年に詩編 23 編を読んで聞かせ、これをいつも思い起こすと良い、と教えました。それから 1 年が過ぎ、再びこの牧師たちはその地を訪ね、ミルクを求めるためにある家に入りました。その家には一人の婦人がいて、炉だにはある少年の写真が飾ってありました。「そうです。この写真は、私のせがれです。羊の世話の番をしている時に吹雪に会い、去年の冬に死んだのです」と、その母親は言いました。更に続けます。「けれども奇妙なことに、せがれは左手の薬指の所を右手で握っていたのです」と。それを聞いた牧師は驚きながら、それはきったことだと言うと言いました。「私たちは昨年羊飼いである息子さんに偶然に出会い、詩編 23 編の言葉を暗唱するように教えたのです。彼は最後の時にもそれを思い起こし、薬指、第四の言葉をしっかりと握っていたのだと思います。」—その詩編の第 4 節は、「死の陰の谷を行くときも わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる」です。

人間的には少年の人生ははかないと言えはかないと言ええるかもしれないけれども、彼の人生は祝福されなかったのでしょうか？ そんなことはありません。地上の生の終わりは、神様の約束の入り口です。―「わたしを苦しめる者を前にしても あなたはわたしに食卓を整えてくださる。わたしの頭に香油を注ぎ わたしの杯を溢れさせてくださる。命のある限り 恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り 生涯、そこにとどまるであろう。」

私たちの真の羊飼いである主イエスが、私たちの人生に香油を注いで下さる。神様に背くものであった私たちを赦し、それどころか祝福の宴を用意して下さい。この方の恵みと慈しみは、むしろ追いかけてくる、と言うのですね。

今、季節は秋です。私たちの人生も秋かも知れませんね。今、先に召された方々と共に、私たちもこの詩編 23 編の言葉の一つ一つに「アーメン」と声を合わせることをさせて頂きたいと思います。それでは一節ずつお読みします。「アーメン」とおっしゃってください。それを私たちの祈りと致しましょう。

